

11/1
2007 No.209
500
yen

pen

with New Attitude

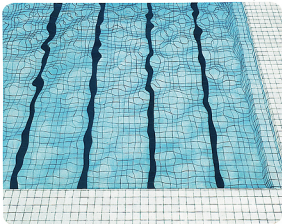
1冊まるごと、
現代アート入門！



別冊付録
ロレックス
ターノグラフの
すべて。

裂け目から覗く、ラテン・アメリカの感受性。

Adriana Varejão 建築家建築



「スイミングプール」

2008年 キャンバスに油彩

タイルで囲まれたプールの中で、静かに流らぬ水が、生き物のような感受性を出してくる。作者の絵画、「血肉」を感じさせたパリのこのデビュー作とのコントラストが面白い。身体的感受性が溢れてくる作品。

Adriana Varejão



「赤むけの白タイル」

2002年 キャンバスに油彩、ボロウレン

ポルトガルの特徴的な白いタイルが裂けて、赤い血肉が覗く異様な絵画。かつての宗主国に対して、その罪を責めつけて出現する「白むけ」を批判的に、かつて植民地を築き直せる作品。

Adriana Varejão



「ロボ・クイーンの絵画Ⅱ」

2004年 油彩、木、鏡台

古い壁紙が剥け、その裂け目から血が覗く異様な絵画。ヨーロッパを中心とした世界史や西洋中心の美術の歴史に強い批判を込め、その裂け目から、もうひとつの世界観や歴史の視点を予感させる。

Contemporary
Art
Now

●1961年リオ・デ・ジャネイロ生まれ。大学ではエンジニアリングを専攻。映画から多くの影響を受け、血肉が特徴するような異質な絵画作品でデビューした。フランク・ロイド・ライトを代表するアーティスト。

プールの中で生き物のように揺れ動く水と、白いタイルの壁の裂け目から覗く赤い血肉。ラテン・アメリカ文学と共通する横断する生と死の感受性を、静かに貫通させるのがアドレアナ・ヴァレジョだ。いまや、ブラジルのコンテンポラリー・アート界の寵児でもある。

美と醜を同時に表現するような作品が放つ強烈なインパクトは、2005年、パリ・カルティエ現代美術財団での個展で注目を浴びた。現在、彼女の個展は世界を巡回中だ。

「私にとって、コンテンポラリー・アートは、映画から学んだと言ってしまうことはありません。デビッド・クローネンバーグ、アレク・ジヤーマン、ピーター・ダーリーナウエイらの作品です。私は学校で習ったような体系的な歴史ではなく、別のバージョンの歴史が存在すると思います。そうだと、もうひとつの歴史を、作品で描きたいのです。これからは、伝統的な絵画の問題にも踏み込んでいきます」

彼女の作品は、植民地時代因ったポルトガル特有の白いタイルと、ブラジルの自然や先住民の記憶をもつ、アラジルの文化と歴史を重層的に表現しているといわれる。それは西洋中心の美術史に対する、南米からの官能的な「異議申し立て」のようだ。